

特別寄稿

## 退任にあたって—図書館情報学と歩んだ歲月—

### 金 容 媛

#### 1. はじめに

2015年3月末日をもって駿河台大学を定年退職いたしました。顧みれば1994年文化情報学部創設時から文化情報資源の管理（図書館、博物館、文書館等）にかかわる研究・教育に携わり20年、恵まれた環境の中で教育に従事できましたこと、感謝しております。

私の人生は、図書館情報学とともに歩んできた軌跡でもあります。1963年韓国の梨花女子大学に入学した際、新設されて間もない図書館学科を選び、その後50年間一貫して図書館と関連した教育、研究、実務に従事してまいりました。図書館学は当時広く知られた分野ではなく、よくわからないままの選択でありましたが、その選択は正しいものであり本当に良かったと思っています。

なぜなら、図書館は人類の記録文化遺産を蓄積・保存し未来に継承する重要な機関として、記録や情報を収集、組織、保存し、人々の要求に応じて提供することを目的としており、図書館の機能と役割は国を超えた世界共通のものであって人類の歴史とともに永続する社会機関であるからです。図書館学は図書館にかかわる諸現象を学問的に研究しようとする研究領域で、資料の収集、組織化、蓄積、利用までの過程や図書館の管理・運営が含まれます。1960年以降は図書館学に情報学が付け加わって、情報やメディアの性質、それらの生産から蓄積、検索、利用までの過程も含まれています。

国内外で私が受けた図書館情報学の教育そして図書館の実務経験は、図書館および図書館情報学

の共通性ゆえに、その後日本を中心に韓国、米国、英国などで活動できる基盤となりました。

このたび退職にあたり、その間同僚や学生と十分に対話する時間をもつことができなかった事柄について話をする機会を与えていただきました。文化情報学部とメディア情報学部の意義、図書館の現在と未来、図書館情報学教育、教育者の責務など、必ずしも学術的内容ではありませんが、率直なメッセージを残したく思います。

#### 2. 文化情報学部とメディア情報学部

人間は自分の知性と感性を言語や絵・音などの記号で表現し、記録し生きています。これは人間のコミュニケーション本能に起因するものであり、自分の考えや感じたことを他の人に伝達することで共通の社会的行為を成しています。人間の記録は、同じ時代を生きる社会で活用されるだけでなく、時間・空間を超え後世にまで内容が伝達され、人類の文化遺産として蓄積される社会的記憶装置です。

記録の技術や方法の発展、新しい記録媒体の出現は人間のコミュニケーションをさらに活性化させるとともに記録情報の量を膨大に増加させています。このように蓄積された情報と知識を人間のあらゆる行為や活動に効率的に活用し、我々の生活を精神的・物理的に一層豊かにすることが情報化社会の目標です。すべての形態の情報を生産・転換・活用する活動が大きな比重を占める社会で、社会全体が情報価値の創出に力をそそぐ状態であるといえます。

しかし情報の効率的活用は容易なことではありません。必要な情報がどこにあるのか、その情報の品質はどうか、どのような方法で取得できるのかなどの問題について、その回答を皆が知っているわけではありません。人間のコミュニケーションの属性、人間の情報要求の実態、情報の属性、メディアと通信技術に関する幅広い知識と技術、こうした理解をもつ情報専門家だけが人間と情報を連結し、情報を効率的に活用することができるのです。

1994年日本で初めての文化情報学部として創設された駿河台大学文化情報学部は「情報は資源として、また人類の共同財産として、未来に伝達する価値をもつもの」と理念を示しました。具体的には情報利用者の需要に応じた必要情報選択の理論の技法、必要情報流通の理論の技法、および情報資源蓄積保全の理論と技法の教育と研究をその目的として、情報資源、特に文化情報資源の流通・利用・保存・管理などを扱う文化情報学を中心対象としたのです。文化情報学部は創設当時から学部課程に図書館・博物館・アーカイブズ分野のコースをもつ先駆的な学部として国内外から注目されました。

文化情報学は複合的な学問分野であり、中心となる分野は「図書館情報学」、「文書館学」、「博物館学」、「記録管理学」などを挙げることができます。例えば、情報資源の組織化・管理などには図書館情報学の成果を利用できます。情報資源の性質および社会的な影響等には「文書館学」、「博物館学」、「記録管理学」がその基礎となり、各分野に共通する点はコンピュータによる処理と利用となります。そのコンピュータを利用した情報資源の生産・蓄積・提供・利用のアプローチが文化情報学の教育および研究に不可欠な要素です。文化情報学部は日本で初めて確立した文化情報資源（図書館、博物館、文書館）にかかわる教育・研究を実施してきました。

その後、メディアを取り巻く環境が急激に変化し、各種メディアの特性に精通し、かつ情報技術

の発展に伴う新たなメディアの出現に柔軟に対応できる能力を持つ人材を育成するため、2009年にメディア情報学部へと改組しました。メディア情報学部のカリキュラムは、こうした情報専門家を養成するためのものです。多様な科目を通じて学問と知識を吸収し、芸術の世界に対する総合的な理解を広め、情報の内容（コンテンツ）を理解することで良質な情報を収集、選択、組織化、蓄積し、適時に適切なメディアで利用できるように検索でき、提供できる能力を養います。また、情報の生産と流通および情報の経済・社会的側面、経営的側面などを幅広く扱う科目を豊富に用意しています。

「さまざまなメディアのデジタルコンテンツを楽しむだけでなく創り出したい」、「提供される情報だけでなく身の回りや蓄積された記録の中に埋もれている情報を活用したい」、「コンピュータやネットワークの仕組みを学んで情報環境の可能性をもっと引き出したい」—このような思いを抱き、将来そのような仕事に就きたいと考えている学生のために、全教員が一致団結して教育を行う学部です。デジタル時代に対応するために改組されたメディア情報学部教育の中で、文化情報学部の理念が今後も生き続けることを願っています。

### 3. 学生のみなさんへ

メディア情報学部は情報専門家を養成するために多様なカリキュラムを提供しています。図書館・博物館・文書館のみならず、データベース作成・提供機関、専門的な情報サービス機関、情報検索、コンピュータ教育担当、一般企業の情報管理など、情報専門家の社会的需要が無限に増加する時代が到来しています。

みなさんの中には、1年目にして大学の勉強が面白くない、専攻が自分に合わないと感じている人もいることでしょう。しかしどうか、簡単に諦めないでください。大学のカリキュラムは、学生が自律性のある生活を営むことができるように工夫さ

れ、新しい機会が与えられるように専攻選択の融通性も高くなっています。自律的な生活と自律的な学問探求を実践し、大学生活で多くのことを学び、感じ、経験してほしいと願っています。

現在の高等学校の教育が大学入学を目的として行われているため、多くの学生は自分の好きなことは何か、一生社会人として何をしながら生活していくのかについて真摯に考える時間がなかったと思われる。また大学を選択する際にも、自分の意思や適性よりはむしろ、合格可能性が高い学部・学科を選択することが多いのが実状ではないでしょうか。

そこで大学1年のときにはぜひとも自分を発見し、それに合わせて大学生活を設計してほしいと思います。大学の学業と真の自分を発見するための多くの時間を読書に割くのであれば、大学1年は一生のための着実な準備と計画を立てる意味ある時間になるであろうと思います。大学入学後、これまで他律により決められていた生活パターンを見直し、自分自身の内面を省察し、自分で考える時間をもってください。人間は社会生活をする中で、周囲の人間や事物から情報を受け入れながら自分と連結して考えます。したがって、社会に関心を持ち、自分は社会で何をしたいのか、何かできるかを考え、自分だけでなく社会に貢献できることは何かを真剣に考えることが自律的な生活の始まりといえます。

学問の世界は無限に広く、知識に対する欲求は社会に必要な力として社会貢献につながります。知性と感性は原石と同じで、磨けば磨くほど輝き貴重なものになります。視野を広げて、心を開いてください。自分と異なる他人の考えを理解し受け入れることで共に生きる豊かさを学ぶことができます。そして常に、自分を大事に、尊重してください。自分を大事に考えない人は他人を尊重することもできません。自分の可能性を信じて努力を続けて下さい。

メディア情報学部のみなさんがこれから活躍する21世紀の社会は、20世紀よりはるかに速いス

ピードで変化する社会です。これはみなさんにとって大きな挑戦ですが、危機はチャンスでもあります。メディア情報学部で身に付けた確固たる基礎を自信にして、「意志あれば道あり」、新しい可能性を拓いていってください。

#### 4. 図書館の現在と未来

まずは図書館の思想的基盤についてお話したいと思います。図書館とは何かについて、いろいろな考え方があり、数千年におよぶその歴史において、時代・社会の環境や要求で変わった部分、変わらない部分があるのも当然であると考えます。

図書館の使命や目的を明示したのものには、「図書館学の五法則」(The Five Laws of Library Science, 1931)、「図書館に関する権利宣言(図書館憲章)」(The Library Bill of Rights, ALA, 1939)、「ユネスコ公共図書館宣言(UNESCO Public Library Manifesto, 1949)」など数多くあります。ここでは、私が長年担当してきた学部科目の「図書館情報学」および「図書館経営論」の授業で図書館の思想的基盤として特に強調した内容である、初期に発表された「図書館学の五法則」と1995年に発表された「未来の図書館」の内容を紹介します。

「図書館学の五法則」は1931年に世界的に知られたインドの図書館学者であるランガナタン(S.R.Ranganathan)が提唱したもので、図書館のあるべき姿を示す普遍的原理を以下の5つにまとめています。

第一法則：本は利用するためのものである。

(Books are for use)

第二法則：本はすべての人のためにある。いずれの人にもすべて、その人の本を。

(Every reader his or her book)

第三法則：すべての本をその読者に。いずれの本にもすべて、その読者を。(Every book its reader)

第四法則：読者の時間を節約せよ。(Save the

time of the reader)

第五法則：図書館は成長する有機体である。(A library is a growing organism)

第五法則に、図書館は成長する有機体であるとし、図書館を構成する資料、利用者、職員の三位一体の調和のある成長を遂げなければならないと強調しています。1931年当時と比べると図書館をめぐる環境は大きく変化していますが、現在では「本」を「資料」(または「情報」)に、「読者」を「利用者」に置き換えて考えればわかりやすいと思います。近年急速に進むメディアの多様化、利用者ニーズの広がりや高度化は、図書館および図書館情報学の教育に次々と新しい課題を提起しています。資料、利用者ニーズ、専門スタッフ、それに図書館機能を支える施設・設備を含めてそれぞれが成長するとともに、一体として調和のとれた成長を遂げる有機体として、急速に変化する社会環境のもとでその役割を果たしていくことが必要であり、1930年代のランガナタンの指摘はますます重要になっていると考えます。

もう一つはクロフォード(W. Crawford)とゴーマン(M. Gorman)が1995年に出版した『未来の図書館(Future Libraries; Dreams, Madness & Reality)』です。ここでは図書館の未来を論理的な根拠に基づき、印刷メディアと電子メディアの共存、実体の図書館と仮想図書館の共存、所蔵とアクセスの共存、図書館司書による仲介サービスと利用者による直接アクセスの共存を主張しながら、技術一辺倒ではない、これからの図書館の基本理念・原則を下記の5つに明示しています。

- (1) 図書館は人類に奉仕するものである(Libraries serve humanity)
- (2) 知識・情報が伝達されるあらゆる形態のメディアは尊重される(Respect all forms by which knowledge is communicated)
- (3) 技術はより良いサービスを強化するために賢く利用する(Use technology intelligently to enhance service)
- (4) 知識・情報への自由なアクセスを保障する

(Protect free access to knowledge)

(5) 過去を尊重し未来を創造する(Honor the past and create the future)

知識や情報を伝達するすべてのメディアは、従来の印刷メディアのみならず新しいメディアも尊重すべきであり、図書館における情報技術はサービスを強化するための手段であり、図書館の目的ではないとしています。図書館は、所蔵する資料だけでなく、外部の資料のアクセスも提供すべきであり、世界のすべての人々が必要とする情報・知識に自由にアクセスできるようにすべきであると述べています。利用者による直接的なアクセスが可能になっても、実体の図書館がなくなったり、司書による仲介の必要性がなくなったりすることは決してないと予測し、ゴーマンはさらに『我々の永続的価値：21世紀の司書職』([Our Enduring Values: Librarianship in the 21<sup>st</sup> Century (2000)])において「司書の任務は変わらないが、司書の任務を達成するために利用する手段と方法は変わりうるし、変わり、変わるであろう」と述べています。

図書館は人類の知的活動の成果を継承する場であり、それを利用して新しい知識を生産する知的創造の場でもあります。このように人類文化の基盤を形成し、これを維持・継承するための図書館は長い歴史の中でその時代の政治的、経済的、社会的、文化的環境の影響を受けながら継続的に発展してきました。今日の情報化社会、知識基盤社会、生涯学習社会における図書館は社会発展にきわめて重要な社会構造として認識されています。

図書館および図書館を取り巻く環境は、1970年代のコンピュータ利用による図書館の機械化(自動化)と1980年代の通信ネットワークの発達により大きく変化しました。1990年代のインターネットの拡散により、世界の図書館のオンライン目録が利用できるようになり、情報の共有と情報へのアクセス提供としての図書館の機能がさらに強化されました。デジタル図書館の出現、電子出版、マルチメディアにより知識・情報の生産およ

び流通体制など様々な変化がもたらされました。

デジタル図書館を意味する用語は以下のように様々使われていますが、その本質は同じです。デジタル図書館 (digital library) は資料のデジタル化を強調したもので、電子図書館 (electronic) は伝統的な印刷媒体が電子媒体へ変換したことを意味するものです。仮想図書館 (virtual) やサイバーライブラリー (cyber) は時間や空間を超え世界のすべての情報資源へのアクセスという観点を強調し、紙なし図書館 (paperless)、マルチメディア図書館 (multimedia) は図書館の媒体 (メディア) 変化を意味しています。

このように、図書館を取り巻く環境の急激な変化は、情報メディアの急増と多様化、時間・空間を超越した仮想的情報システムによる「デジタル図書館化」であります。デジタル図書館は便利であり、デジタル情報の交換が可能で、印刷メディアの短所を克服でき、新しい情報サービスを可能にするなど、多くの長所があります。従来の図書館という建物の中での利用に限定されていたものが、コンピュータとネットワークの接続が可能なところであればどこからでも利用できるようになりました。

しかし、人類が持つあらゆる既存の資料をデジタル化することは不可能であり、また全世界がネットワーク化され、全ての人々がいくつもコンピュータを持ちどこでも自由に使えるというのは当面不可能と考えられます。また、私たち人間は必ずしもすべての情報・資料をデジタル化して使いたいわけではありません。たとえば、必要とする情報はコンピュータで利用するけれども、好きな文学作品となるとコンピュータ・タブレット・スマートフォンなどの画面ではなく、紙の冊子体で好きな場所で好きな姿勢で読みたいと思う人が多くいるわけです。

このように印刷メディアと電子・デジタルメディアが共存する状況で、未来を予測するなど容易ではありませんが、図書館の未来について考えてみたいと思います。今後も情報技術を中心とし

て技術的發展は継続していくが、図書館そのものはなくならず、図書館のパラダイムが究極的には「ハイブリッド図書館」概念に転換するものと予測されます。

図書館の未来についての議論は、否定的なものと同肯定的なものに大別されます。否定的な論者は、著名な情報学者であるイリノイ大学名誉教授ランカスター (F.W. Lancaster) です。その著書『紙なし情報システム』([*Toward Paperless Information Systems*(1978)]) や『電子時代の図書館と図書館員』([*Libraries and Librarians in an Age of Electronics*(1982)]) において、2000年には紙なし情報システムが到来すると予測しました。また、トムソン (J. Thompson) は『図書館の終末』([*The End of Libraries*(1982)]) において印刷媒体の図書館はなくなると予測し、さらには、印刷媒体と利用者との仲介の役割を果たす司書の退出にまで言及しました。ランカスターやトムソンの予測に反して、2015年現在でも紙なし情報システムの到来や印刷媒体の図書館がなくなる兆候は見えません。むしろ印刷媒体も図書館も増えつつあります。

他方、肯定的な論者はクロフォード (W. Crawford) とゴーマン (M. Gorman) です。その著書『未来の図書館：夢・狂気・現実』([*Future Libraries: Dreams, Madness & Reality*(1995)]) において、図書館の未来を否定的に見る研究者たちを狂気 (madness) と呼んで辛辣に批判した上で、印刷媒体と電子媒体の共存、primary text と hyper text の共存、司書による仲介サービスと利用者による直接アクセスの共存を主張しています。司書の任務については変わらないとしつつも、「その任務を達成するために利用する手段と方法は変わりうるし、変わるであろう」と述べています。彼らの論理を支えるのは、「図書館は究極的に知識の増進と文化の保存に時間・空間を超越しようとする人間の持続的な努力に意味を付与するために存在する」という、図書館の存在理由の普遍性です。

ここで司書の資質について強調しておきたいと思います。図書館の使命を達成するためには司書がその任務を効果的に遂行しなければならず、そのためには司書として求められる資質を備える必要があります。一般的資質 (competencies) とは、個人が特定の職位において成功するための必要な知識 (knowledge)、技能 (skills)、態度 (attitudes) をいいます。米国専門図書館協会は資質を専門的資質と個人的資質に分け、専門的資質とは図書館と情報に関する様々な知識を、個人的資質には司書として必要な一連の技能、態度、価値をその要素に挙げています。

態度は「人性」、すなわち個人のもつ品性を包括的に指し、「人性」のもつ重要性は司書に限られたものではありません。「人性」は資質の重要な要素であり、時には知識や技術より重視されます。司書になりたい人は、まず司書になるための知識と技能を習得するだけでなく、望ましい人性の涵養に最善の努力をする必要があります。司書になっても専門的業務を遂行するために絶え間なく新しい知識と技能を習得する努力が必要であるように、人性の生涯不断の陶冶が必要であるということです。司書として優れた資質は、利用者へ提供するサービスと直結し、利用者の満足度に連結され、さらに司書自身には仕事に対する満足感を与えることとなります。専門職として利用者が必要とする情報を提供することで社会に貢献できるやりがいは専門職に与えられた祝福とでもいうべきもので、同時にその存在理由でもあります。

## 5. 新しい図書館情報学教育

私は非常勤を含めると30年以上図書館情報学の教育を担当してきましたが、現在の図書館情報学教育には非常に危機感をもっています。これまでは大学教育を受ければ一生仕事をしていくことができました。しかし現在教育を受けている学生の場合、例えばあと40年活躍するとして、その40年間に必要とする知識と技術を現在の教員が

すべて教えることはできません。現在私たち教員はどちらかというと新しい技術中心の教育をする傾向にあります。しかし、本当にそれでいいのか。基本的な知識と技術こそ充実させるべきではないか。思想的基盤、教養はどうか。ただ見せるだけでなく、なぜそうなのかを教え、いま目でみえない情報の海とか、そういった深いものを教えなければいけないのでは、と考えます。いまはもう情報に国境のない時代になっているわけで、情報リテラシーの問題、言語の問題、デジタル・デバイドの問題を含めて、様々な情報技術をどう使うかを問い直す必要があります。

いま図書館が直面している新しい役割があつて、そのためには財政的な基盤なども必要ですが、何よりも重要なのが人的資源であり、そのためには図書館情報学の教育と訓練が大切であることは言うまでもありません。いままでの情報管理は情報の組織、情報処理あるいは情報システムという側面が強調されていたのですが、これからは知識・情報資源から知識・情報のクリエーション、つまり人間・利用者中心の新しい知識を創造することが重要になります。そして、情報管理のプロセスや保管・保存中心ではなく、それらを人類が共有し活用することが重要であることは上記の『未来の図書館』においてゴーマンらが明確に説明したとおりです。

図書館のこれからの役割は「知識情報資源の管理と新しい知識の創造」といえます。いまの社会環境の大きな変化の理由は、学問と技術の相互補完的な発展によって知識が急激に成長したこと、インターネットやウェブの急激な拡大によって様々なデジタル情報や知識へのアクセスと流通が可能になり、それが爆発的に成長したことによります。もう一つの理由は、いままでは形式知 (明示的な知識) つまり文書化されて公開され、構造化され固定化されたコンテンツ中心だったものが、これからは暗黙的な知識、つまり文書化されていない個人的なもの、内面化しているものや、人間の経験と行動といった暗黙知も含め、その両

方の知識を管理することの重要性が認識されたことです。

21世紀の知識社会における図書館員は、例えば車でいうと後部座席に座っているのではなく、知識資源の管理の専門的知識と経験、ビジョン、リーダーシップをもって前の席に座るべきであって、これからの知識社会をリードしなければなりません。著名な歴史家でもある米国議会図書館のビントン館長（1987年～2015年在任）は講演中に「図書館は、魂の憩いの場、人生の喜びや楽しさを与える公共の場である。図書館員はナレッジ・ナビゲーター（knowledge-navigator）であり、ドリーム・キーパー（dream-keeper）であるべきだ。」と述べ、「どんなに性能の優れた機械であってもその役割を代替することはできない。」としました。今も心に残る言葉です。

図書館員の知識と経験は、その図書館の知的財産であり価値が認められるべきで、組織全員が共有すべきであるという、組織文化の重要性も強調されるべきです。そのためにはやはり図書館管理者の指導力、職員がビジョンを共有することが重要になります。

日本における図書館員（司書）の社会的地位や認知度が低いのはなぜか、専門職として必ずしも確立していないのはなぜかを考えると、教育に起因するのではと思います。これからの教育を考えると、技術や情報管理の知識だけでなく、よく「ライブラリアン・ポリティックス」といわれるように、図書館員も政治・法律・経済の知識はもちろん経営管理や運営の知識をもつ必要があると思います。さらには社会のリーダーになるためのリーダーシップのスキルとトレーニングが必要であり、使命感と責任感をもって取り組んでいかなければならないと思います。図書館員の社会的認識を高めていかなければ、知識社会における日本の社会基盤が弱くなり、日本の図書館はその役割を十分果たすことができないのではないかと危惧しています。

## 6. 教育者の責務

現在の学生は私たち教員とは認識の変化があり、価値観と生活様式も違うわけで、さらに新しい世代となればもっと違ってくると思います。すぐそこにある情報の海をうまく活用しながらどう教育したらいいのか、ずっと悩んできました。情報サービスと情報資源をどう結びつけていくのか、具体的にどのような教育を実践していけばいいのか、大変困難かつ重要な課題です。

こうした状況で、教育の意味と教育者の責務を私は日々問われていました。教育とは、単なる知識や技術の伝達だけでなく人間性や人格を伝えるものであること、また自分の考えだけではなく、その人の立場で考えることを教えることだと考えています。

いまの教育は、急激に進化する技術の影響で技術中心になりがちであり、人間の社会がお互いに理解し助け合って成り立っていくものであるにもかかわらず、人間性の教育が不十分であるように思います。

どの時代においても人間は多くの変化を経験しながら生きていますが、人間の本質や感性、生き方はそれほど大きく異なるものではないでしょう。人類の起源は明確に解明されてはいませんが、悠久の時間の流れのなかで様々な変化があったものの人間の本質は変わらず、これは世界には変わるものより変わらないものがより多いことを意味すると思います。

例えば子どもが大人になるには一定の栄養素と一定の期間が必要であるという事実、知的基盤を構築するには一定の教育期間が必要であるという事実、オンラインで買物ができて商品も配達には実際モノが動くといく事実、これらは人間と時間との関係、人間と物質との関係を示していると思います。人間の感性も、どれほどインターネット上の会話が普及しても、実際の人間と人間との出会いが必要であるという事実は変わらないものです。

コンピュータをはじめとする技術の影響力が拡大され、環境が急速に変化していく中で世の中のすべてのことが変わっているように映ります。しかし、変わる事のない「人間の本质」を区別し、教えることこそ真の人間教育であると思います。お互いに理解し、尊重し、ともに分かち合って生きていくことは、人間が人間であるかぎり変わりません。

学生たちは教員を先生と呼びますが、先生とは「先に生まれた人」という意味であって、教員には「先に生まれた人」としての責務があり、それを忘れてはならないと思います。各人の生き方は多様であるけれども、同じ時代を共有し、一つの時代の歴史を作り、それを次の世代に継承するという人類の知識と文化の連続性について、教員は先に生まれた人生の先輩として、若い学生たちに伝えていく責務があると考えています。

## 7. おわりに

私は駿河台大学を生涯の職場とし、自身の希望である図書館情報学の教育に従事できましたことを神の恩寵であると感謝しております。

これまで20年間、駿河台大学の教育機関としての雰囲気、知性の自由や自律性から多くのものを与えられ、初代学部長の安澤秀一先生を中心とする創立メンバーの一員として諸先輩から多くのことを学びました。全員のお名前を挙げることはできませんが、同僚の、特に、現メディア情報学部長の村越一哲教授、岸田和明教授（現在慶應義塾大学）、保坂裕興教授（現在学習院大学）には感謝しております。また、駿河台大学では、憲法学の杉原泰雄先生（当時法学部長、現在名誉教授）が研究者としてのあるべき姿を示してくださり、多くを教えてくださいましたこと、深く感謝しております。

来日して34年の間、多くの方々の温かい配慮と支援に恵まれました。特に慶應義塾大学大学院文学研究科（図書館・情報学専攻）修士課程でご指導いただいた（故）津田良成教授、指導教授である高山正也名誉教授への感謝は言い尽くすことができません。

慶應義塾大学大学院博士課程修了後に着任した（[当時]文部省）学術情報センター研究開発部では、日本の学術情報システムの構築・流通に関連する研究に専念することができ、大変幸運なことでありました。特に東アジア、とりわけ日本、中国、韓国との学術情報交流のみならず、様々な歴史・文化の記録や情報を共有するために積極的に行われた共同研究に参加することができ、その後の私にとって大きな財産になりました。ご指導くださった内藤衛亮名誉教授に深い感謝の意を表したいと思います。学術情報センター所長の（故）猪瀬博先生は、人への思いやり、文化を尊重する心までも教えてくださいました。図書館情報学分野の現在の発展をみると、こうした先駆者、偉大な先輩方の足跡に想いを馳せずにはいられません。

日本で教育・研究に携わる弟子を温かく見守ってくださった母校 梨花女子大学・大学院の（故）李鳳順先生と韓国の図書館情報学分野の諸先輩方にも感謝申し上げる次第です。

もし私に与えられた使命があるならば、日々の教育・研究に全力を尽くすこと、日本における図書館情報学の発展に寄与することであり、少しでも恩返しができればと努力してまいりました。今後も日本と韓国の図書館界および図書館情報学分野の協力関係にわずかなりとも寄与することができればと願っております。

最後に、駿河台大学およびメディア情報学部の発展、同僚・職員のみなさまのご健勝を心より祈念いたします。